4)顯國神社の祭礼に見る歴史的風致

顯國神社の由来

顯國神社

湯浅の古くからの市街地とその周辺で執り行われる伝統行事に「顯國神社の祭礼」がある。顯國神社は、旧湯浅村（現湯浅町大字湯浅、別所、青木、山田）の総鎮守として地元では「大宮さん」と呼ばれ、氏子らの崇敬を集めてきた社である。社伝によれば、顯國神社の創祀は、延暦 20 年（801）に坂上田村麻呂が有田郡霧崎菖蒲の里（現湯浅町大字田字小濱ないし大字栖原字下地）に到って同地の神々を崇敬し、社殿を造営して大國主明神として祀ったのが始まりとされる。その後、天養元年（1144）には、この地の土豪湯浅宗重によって当地に勧請され「顯國明神」と改称して、湯浅一族の信仰を集めた。江戸時代の寛文 8 年（1668）12 月には、徳川頼宣より「顯國大明神」の社号を授与され、これが先例となって歴代藩主の参詣または代参があるなど紀州藩にも篤く崇敬された。近世以前の顯國神社の社役は、深専寺（浄土宗西山派）の支配に係り、寺中の東の坊が社僧を勤めたという。現在の本殿は江戸中期のものと考えられ、拝殿は元文 2 年(1737)、祝詞殿は明治 21 年(1888)の建築である。

顯國神社の祭礼

若宮祭（宵宮）

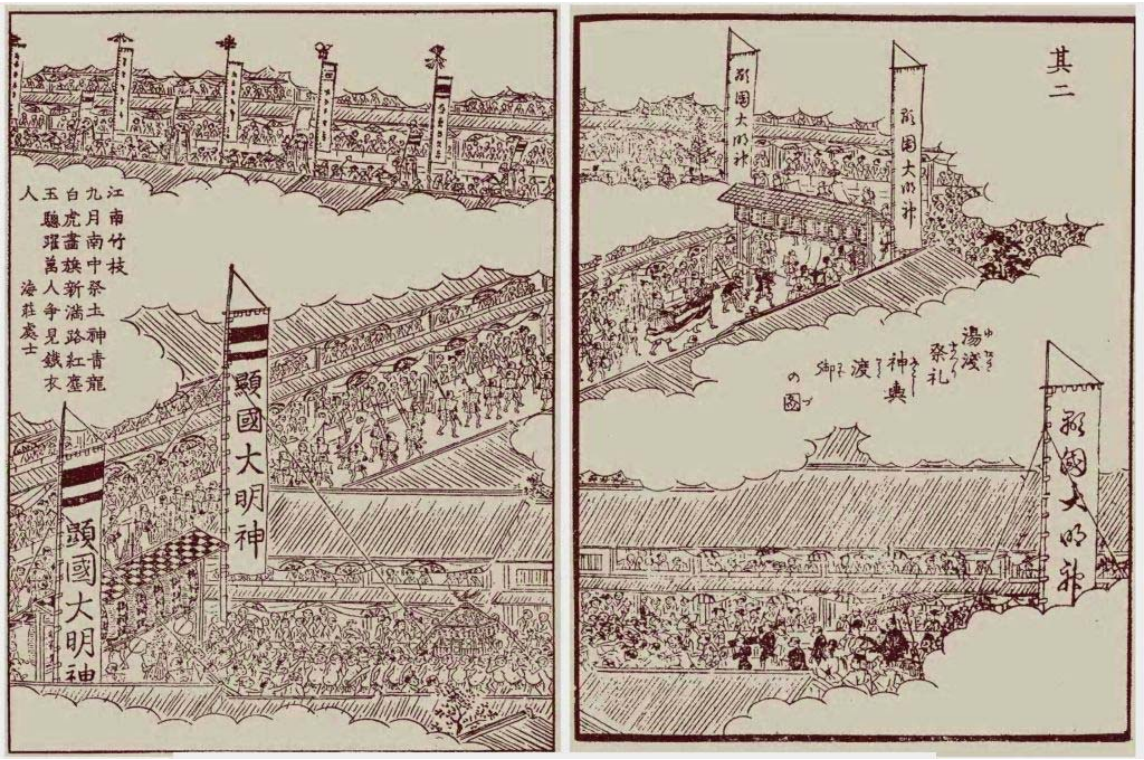
顯國神社の祭礼は、毎年 7 月 18 日の若宮祭（夏祭）と、10 月 18 日の顯國神社の例祭（秋祭・湯浅祭）である。若宮祭は、明治 44 年（1911）に顯國神社に合祀された若宮神社の祭礼で、7 月 17 日の夕刻に顯國神社境内にある若宮社での宵宮祭、翌 18 日には本祭が行われ、御旅所である南恵比須神社までの神輿渡御と、オニ・ワニが獅子を退治する三面獅子舞が奉納される。若宮神社は、社伝によれば、後鳥羽院熊野御幸の際に湯浅宗方に下賜した神社で、以後、宗方が崇敬して鎮守神として祀り、宝治元年（1247）に青木の花園山に遷し若宮神社と号したという。青木の旧社地には今も社殿が残る。

天保五甲午九月
流鏑馬仲間定　御旅町

10 月 18 日の湯浅祭は、顯國神社で最も大きな祭礼であり、多くの氏子が参加して神輿渡御行列や三面獅子舞の奉納が行われる。湯浅祭では、かつては「流鏑馬」と称する各町から出された「組馬（箱馬、町馬ともいう）」による駆け馬などの行事が盛んに行われたが、これは、昔、田中九郎助（生年不詳～1651）という者が社前に馬を集めて流鏑馬をしたのが馬寄せの始まりであると伝えられる。田中九郎助が住んでいたといわれる界隈の町組は、今も「九郎助」という町名で祭礼に参加している。

江戸時代の湯浅祭の様子は、嘉永 4 年（1851）の『紀伊国名所図会』に描かれており、「湯浅祭礼神輿渡御の図」では、沿道の家々は格子を外し、幔幕を張って飾りつけ、見物人が町を埋め尽くし祭一色となった当時

の華やかな祭の様子がうかがえる。



湯浅祭礼神輿渡御の図

行列の先頭を行くのは湯浅の各町組から出された組馬であり、その後ろに連なる列は顯國神社から出される神幸行列で、その中には三面獅子舞も見られる。「湯浅町々より駈馬を出す図」に描かれているように、各町組は馬の飾りや武者の鎧、母衣、幟、矢取りの子どもや口取りの衣装に贅を凝らした。古くは祭前日の神社前の馬場や、祭礼当日は、御旅所からの還りに北の松原より北町筋を馬場に見立て、組馬や近郷より参加した客馬が疾走する駆け馬の行事が行われた。明治24年（1891）の祭礼では、組馬、客馬合わせて90頭にものぼり、かつての湯浅祭は、豪華な馬具や衣裳を飾り付けた組馬の行列や駆け馬が行われる有田地方最大の馬祭りであった。

湯浅町々より駈馬を出す図

このように、顯國神社の秋の祭礼では、かつては湯浅の町組ごとに華麗に仕立てた騎馬武者を渡御行列に参加させるのを古例とした。町内には単独の町や数ヵ町の連合、同業仲間など大小20ほどの組（箱組）とよばれる組織が存在し、現代にも受け継がれている。組の組織は、時代によってその数が増減し、戦後に出来た新しい組もあるが、現在ある組の多くは古くからある組が時代ごとにその範囲を少しずつ変えながら継続している。

組馬（昭和15年 濱町）

湯浅祭の基本的な形態については、少しずつ形を変えな

がらも昭和戦前の頃まで引き継がれ、その華やかで勇壮な湯浅祭の組馬の評判は県内外に広く知れ渡っていた。しかし、戦後になると馬中心の祭りの様相は徐々に変化し、昭和 30 年代後半からは、農耕や荷役に従事し「馬力（ばりき）」と呼ばれた馬が減少して手配が難しくなったことと、大勢になった子供たちが祭りに参加できるようにと、組馬に替わって子供神輿を出す町組が増えていった。

駆け馬（昭和 27 年）

祭礼の準備は、10 月初旬頃からそれぞれの組で世話役を中心に始められ、組内の家からの掛金集めや、宿の飾り付けをおこなう。組の拠点となる宿は、祭りの一週間ほど前に飾り付けられ、祭り当日まで組の者が集まって交代で番をする。組によって年ごとに家の周り番である場合や毎年同じ集会所などの場合がある。宿のしつらえは組ごとに異なり、組馬から各町の神輿などに変わるにつれて「馬宿」が「神輿宿」へと様子が変化した町組もあるが、伝統的な馬宿のしつらえは、表には組名を書いた赤い羅紗（らしゃ）地の幟を立て、宿の提灯を飾り幔幕を張る。注連縄を回らした座敷には、組馬の騎馬武者が着る甲冑を中心に、馬具、金銀の刺繍柄の入った赤母衣（ほろ）、矢取り・口取りの衣裳を飾り、御幣（ごへい）、神札（しんさつ）、鏡餅、懸け鯛、御神酒（おみき）などを供える。

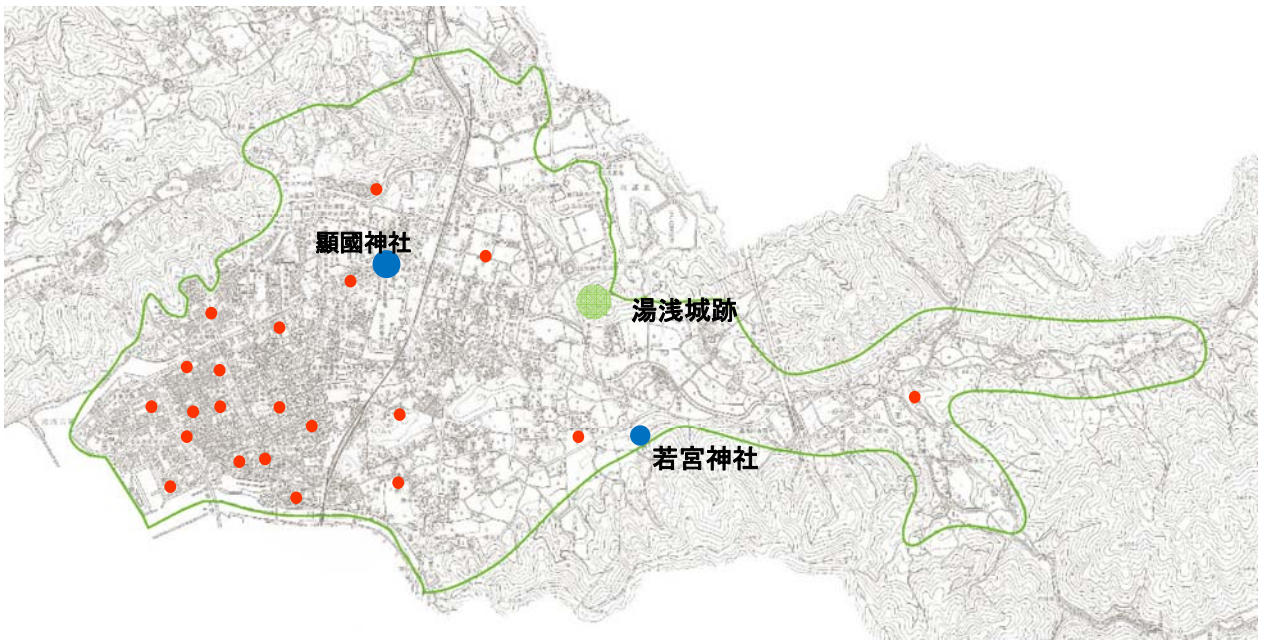
渡御の出し物に鳴り物を出す組では、夜になると太鼓などを練習する音が聞こえ、神輿を奉納する組も、祭礼前日や当日の朝に、太鼓や笛を鳴らしながら山車に乗せた神輿を引いて町内を練り歩く。こうして馬宿を起点に祭りの準備が始まり、その周辺から祭り気分が高まっていくのである。

馬宿（神輿宿）〈北町〉

馬宿（神輿宿）〈九郎助町〉

市街地を練り歩く山車〈王城〉

前日に町内を神輿が練り歩く〈本町〉



祭礼にかかる市街地や集落の範囲と馬宿（神輿宿）の分布図（平成 27 年）

湯浅祭の本宮当日の朝には、各宿では祭を支える町組の家々に対する御礼のため、的入れの行事が行われる。かつて組馬が出ていた頃には、町ごとに豪華な飾りをつけた組馬の騎馬武者が町を練り、介添えが持つ柄の付いた板の小的を扇根で打って礼をし、宿に供えた鏡餅を切り分け家々に配ったが、現在は鎧武者が歩いて的入れを行う場合や、山車を出して町内を練り歩き、餅を配布する町組も多い。そんな中、重要伝統的建造物群保存地区内にある古くからの町組の一つである北浜町では、失われつつあった湯浅祭の伝統を守ろうという思いから、平成 21 年（2009）の祭礼から古式に則った騎馬武者による的入れを再開させた。この的入れは「チョンマ」と呼ばれ、町内の男性が鎧武者として騎乗し、縮緬の法被を着て化粧前垂れを着けた口取り二名が、馬の手綱を取って町内を回り、通りに面した家には玄関先で的を 2 つずつ打ち、小路にある家の場合には、小路口から家の軒数につき 2 つずつ的を打って、祭り運営への返礼とする。伝統的な町並みを闊歩する騎馬武者の勇姿に、集まった北浜町の氏子たちからは拍手と歓声が上がる。

騎馬武者の的入れ（チョンマ）北浜町

湯浅祭の本祭は、正午から本社神前において神事が執り行われ、その間に、各町組の子供神輿などの渡り物が鳥居前に集まってくる。その後、神社境内の拝殿前の参道において三面獅子舞の奉納があり、これが終了すると、いよいよ行列が神社を出発して神輿渡御が始まる。

鳥居の前に集まる氏子たち

現行の行列順は、三面（オニ・ワニ・獅子）→神輿・

榊・御供箱・供物→神職→宝剣→氏子総代会が続き、各町の組馬や子供神輿、提灯屋台、時代行列、太鼓組などの趣向を凝らした行列が、本神輿一行の前と後ろにくじで決められた順番により配される。行列の順番や渡り物は時代によって一様でなく、戦前には御所車なども列した。湯浅祭の神輿渡御の道のりは、途中までは夏の若宮祭の場合と変わらず、大宮前の道を西進し、字馬出（うまで）・馬止（うまどめ）を経て南道（なんどう）に入る。この辺りは大正から昭和初期にかけて市街化が進んだ界隈で、湯浅醤油株式会社の跡地や湯浅小学校講堂の前を通る。南道から本町通りを西に進んで熊野街道の立石道標が建つ道町に至る。若宮祭の渡御ではここから道町を南進するが、湯浅祭では、行列は立石の四辻（よつつじ）を直進し、深専寺の門前を横切って鍛冶町通りを北に折れて進み、御蔵町（おくらまち）を越えて醤油醸造で栄えた町並みへと入る。ここまで来る間に何度か休憩を取りながら行列は進む。また、途中では三面獅子舞も披露される。

三面獅子舞の奉納

神輿渡御行列

北町に至り、さらに北町通りを西へと進み、旧市街地の北西にある御旅所の北恵比須神社に到着する。なお、行列に参加する町組が増加したことにより、昭和 57 年（1982）からは本渡御行列に並行した別の順路も設けられ、町組の半数はこちらの順路を進む。

北恵比須神社では御旅所祭の祭典が執り行われる。その後、埋立地にあるなぎ公園に移動して三面獅子舞が披露され、三面獅子舞が終われば餅撒きが行われ、祭りの役員が懸け鯛や、お供えの餅や菓子を投げ、参列者が拾い合う。これらが済むとお戻りとなり、祭りは一連の行事を終える。

御旅所での祭典

餅撒き

7 月 18 日 若宮祭及び 10 月 18 日 湯浅祭 神輿渡御順路図（平成 27 年）

顯國神社の三面獅子

祭礼の形態が時代の流れにより変化しても、顯國神社の三面獅子は、以前と変わらぬ形で今も神幸行列において重要な役割を担っている。顯國神社の三面獅子がいつごろから伝わっているかは不明であるが、嘉永４年（1851）の『紀伊国名所図会』にその姿が描かれていることから、少なくともその時代の祭礼に奉納されていたのは間違いない。かつては町組の北王城（きたおうじょう）と南王城（みなみおうじょう）の若衆によって受け継がれており、双方の若衆が隔年交代で獅子舞を奉納したが、昭和 38 年（1963）に北栄精華（ほくえいせいか）青年団が加わり三交代で獅子を奉納するようになり、その後、昭和 53 年（1978）に「顯國神社三面保存会」を発足させ、獅子舞の芸能が保存・伝承されている。

昭和５年頃の三面獅子（北王城）

三面（左からオニ・獅子・ワニ）

顯國神社の三面獅子は、オニ、ワニ、獅子が一つの締太鼓に合わせ動作する。オニは鼻が高く、ワニは牙がある。いずれも鳥兜に袴装束で草履を履き、左手に鈴の付いた鉾を担ぎ右手には紙垂（しで）を持つ。獅子は二人立ちで、前垂れが白黒の縞模様で裾が白い緋色の胴幌に、木を削り出して作られた獅子頭は約 10 キログラムもの重量がある。

三面獅子の舞は締太鼓の早打ちを合図に始まる。すぐに重々しい調子に変わると、オニ、ワニは、紙垂を祓うように振り、踊りながら筵（むしろ）の上まで獅子を誘う。獅子は進みながら、時折オニが持つ鉾の鈴を狙って咬み付く動きを見せる。筵に着いた獅子の鼻先にオニが鉾を突き立てると途端に獅子は怒り、縦横無尽に暴れ狂う。その間もワニは周囲を踊り続け、オニは鉾を突き立てた姿勢を崩さず獅子と対峙する。やがて獅子は静まり、オニの鉾先に顎を乗せて恭順の姿勢を示す。ついには寝てしまった獅子の頭をオニが紙垂で叩いて起こし、最後は紙垂を回しながらオニ、獅子、ワニの順に並んで駆け去ってゆく。

この舞が披露されるのは、毎年７月 18 日の若宮祭本宮（ほんみや）とその前日の宵宮、10 月 18 日の例祭の本宮である。祭礼時は神前式の後と渡御の道中においても披露される。また、三面獅子が現れると、氏子たちが「鈴を頂く」光景が見られる。これは、オニ、ワニが持つ鉾に付いた鈴を頭上で振り鳴らしてもらい、お得を頂く風習である。また、獅子に頭を噛んでもらうと病気にかからず、頭も良くなるという言い伝えもある。獅子にお願いすると、パクパクと歯を打ち鳴らし、氏子の頭上で大きな口を開けて頭（かしら）に付いている鈴を振り鳴らす。小さな子供はあまりの怖さに泣き出すが、親たちは泣きながらも頑張った我が子をなだめて褒め、健やかな成長を願う。

オニ・ワニの鈴を頂く氏子

獅子に頭を噛んでもらう氏子

顯國神社の三面獅子は、暴れ狂う魔物である獅子をオニとワニが退治するもので、五穀豊穣、商売繁盛、無病息災の願いを込めて奉納される。祭礼には欠かすことの出来ない伝統的な民俗芸能であり、氏子である町民に永く親しまれ、敬われてきた。平成 10 年（1998）には、湯浅町の民俗芸能として湯浅町指定文化財に、さらに平成 21 年（2009）には、当地域の獅子の芸能の変遷と地域的展開を考える上で貴重な存在であるとして和歌山県無形民俗文化財に指定された。

三面獅子舞の奉納

お祭りに欠かせない伝統の味「ナレズシ」

顯國神社、國津神社、幸神社の秋祭りに欠かせないものに「ナレズシ」がある。有田地方を中心に、北は海南市から南は日高辺りまでの和歌山県の中部地域で作られる郷土料理で、祭礼行事に直接使われるものではないが、秋祭りの時期にだけ作られて食す風習がある。鯖の押し寿司のように見えるが、酢を使わずに乳酸発酵させており保存が効く。室町時代に開発されたスシの原型といわれ、「近江のフナズシ」「秋田津軽のハタハタズシ」と並んで日本三大くさり寿司の一つといわれている。

ナレズシ

作り方は、先ず開いた鯖を 1 ヶ月程塩漬けにする。祭りの 10 日程前に取り出して、水で晒してわずかに塩味が残る程度に塩抜きし、小骨を取る。炊きたてのご飯に塩を振り込んで冷まし、枕木状に固く握る。これに先ほどの鯖を被せて握り、アセ（ダンチク）やバランの葉で巻いたらシュロの葉などでほどけないように縛る。これを専用の木箱や樽などにぎっしりと並べてふたをし、重石や締木をかけて 7 日～10 日経てばナレズシが出来上がる。ただし、ご飯には塩を入れず、樽などに並べてから塩水を少量、全体に回しかけるなど、各家によって作り方に

鯖とご飯をアセの葉で包む

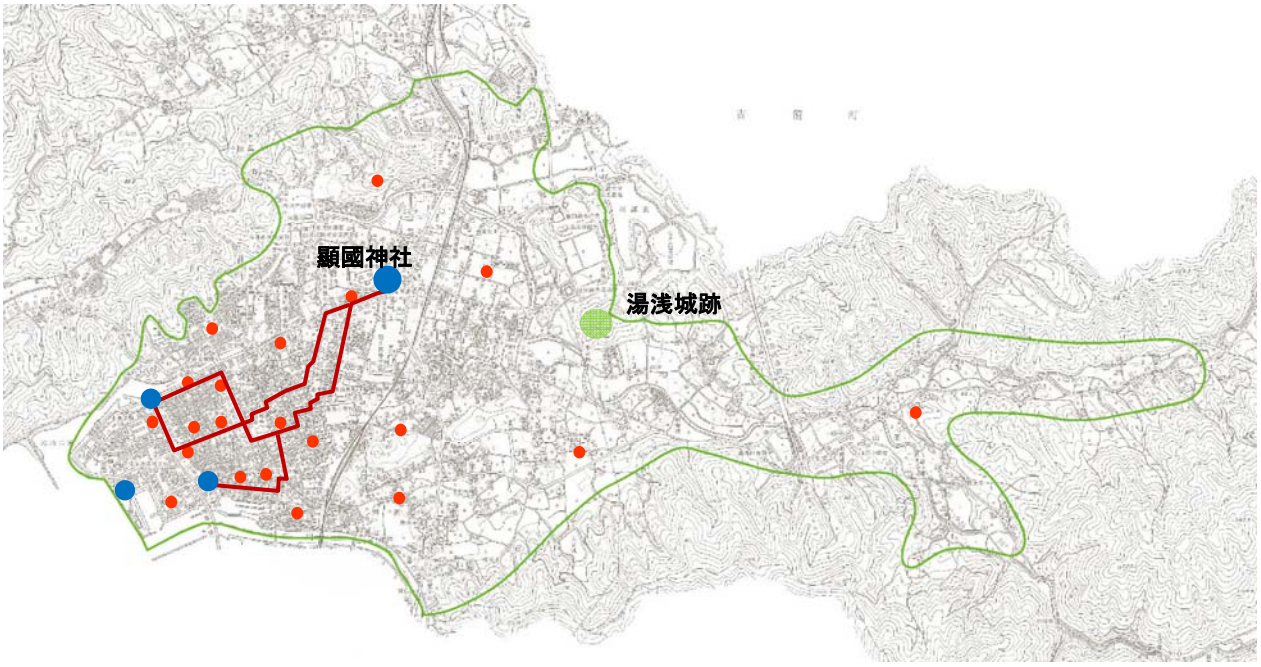
違いもある。食べるときはそのままの状態で切り分けるか、アセやバランを外してから適当な大きさに切り、土ショウガを添えて食べる。発酵した鯖が放つ独特の臭いから苦手な人もいるが、熟成された鯖の旨味が塩味と酸味で引き立たされ、酢を使った寿司とは全く異なる深い味わいを持つ。よく漬け込んで風味が増したものは酒の肴になるほどである。

木箱にぎっしりと詰める

祭りの時期には親戚やご近所・知人などの間で自家製のナレズシのやり取りがあり、塩加減や漬け込む環境の違いから各家によって風味や味わいが異なるナレズシを品評しつつ食べるのも楽しみの一つである。近年は店舗やスーパーなどで購入したり、酢を使って作る「早寿司」で代用したりすることも珍しくなくなったが、手間隙をかけ「我が家の味」を守る家庭もまだまだ多い。

重石を乗せ発酵させる

顯國神社の秋祭りは、有田地方で古くから最も盛況な祭礼として知られ、今も多くの参拝客や聴衆で賑わう。勇壮な騎馬武者行列が減少するなど、時代の移り変わりとともに変化を余儀なくされたところもあるが、現在も、歴史ある神社の社殿で執り行われる神事をはじめ、チョンマの的入れや神輿渡御行列、民俗芸能の三面獅子舞などが継承され、醤油醸造の町並みや熊野街道、湯浅城跡といった固有の歴史的景観を有する市街地や集落の中で繰り広げられている。顯國神社の祭礼は、神事にまつわる慣わしに食文化も一緒になって町民の生活に広く深く根ざしており、これら全てが相まって地域独自の歴史的風致が形成されている。



凡例	神社、御旅所、主な三面獅子奉納場所	●
	平成 27 年（2015）の馬宿	●
	平成 27 年（2015）の神輿渡御順路	▬

顯國神社の祭礼に見る歴史的風致の範囲